

P-018

新生児、乳児期からの育てにくさの要因と支援に関する調査報告

石川 卓磨¹⁾、橋本 創一²⁾、小柳 菜穂¹⁾、
田中 里実³⁾、岡本 茉桜¹⁾、秋山千枝子⁴⁾

¹⁾東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科、

²⁾東京学芸大学、³⁾東京都立大学、

⁴⁾あきやま子どもクリニック、⁵⁾日本学術振興会

【目的】

これまで育てにくさの要因は、子ども、親、親子関係、環境の4側面で整理されてきた。しかし発達段階によって、その要因は変わることが報告されており、乳児期において特に影響が大きいのは、子どもの要因における睡眠、授乳や食事、衛生面や身辺処理、感情コントロールの4項目と示唆されている（橋本ら、2023）。そこで本研究では、新生児や乳児期からの育てにくさに対する4項目の影響を量的、質的に調査した。

【方法】

対象：0～6歳児の保護者1106名。

期間：2024年4月～2025年1月。

方法：Googleフォームによる質問紙調査。

質問：1.子どもと保護者の基本情報。2.育てにくさの5件法評定。3.子どもの要因の4項目に関するストレスや困難感の5件法評定。4.質問2と3に関する具体的な悩みの自由記述。

量的分析：育てにくさと4項目の5件法評定における平均値の算出と重回帰分析。

質的分析：育てにくさや4項目に関する悩みの自由記述をKJ法で分析。

倫理：回答は任意であること、調査データは統計処理し、個人が特定される恐れはないこと、結果については学術的な目的以外に使用しないこと等を明示し、承諾を得た（東京学芸大学研究倫理委員会承認）。

【量的分析の結果】

育てにくさを感じる保護者は、新生児の時点で16.1%、生後2か月～0歳で20.9%、1歳で26.1%、2歳で34.6%、3～6歳で46.8%であり、月齢や年齢が上がるごとに増加した。0～1歳児において、子どもの要因の4項目はいずれも育てにくさを有意に説明していた（ $p < .001$ 、調整 $R^2 = .450$ ）。

【量的分析の結果と考察】

育てにくさのある0～6歳児の感情コントロールに対する悩みは「1：乳児期特有の頻繁な泣きや、母親への強い執着」「2-A：自我の芽生えに伴う、反抗的／挑戦的な態度」「2-B：特定の社会的場面で気難しくなる性格等の特徴」の3種に分類できた。それらが睡眠、授乳や食事、衛生面や身辺処理の問題と絡み合い、保護者に「過度な心労や寝不足、倦怠感」等を生じさせていた。感情コントロールの「1：乳児期特有の頻繁な泣きや、母親への強い執着」の悩みは、睡眠の問題と相互増大するように読み取れた。また「2-A：自我の芽生えに伴う、反抗的／挑戦的な態度」の悩みは、睡眠、授乳や食事、衛生面や身辺処理の問題と相互増大するようであった。

P-019

「子育てひろば」の利用を保護者はどのようにとらえているのか？

—子育てひろば利用者アンケートの分析を手がかりにして—その1

—

横尾 晴子¹⁾、細田 直哉²⁾、大豆生田千夏²⁾

¹⁾田園調布学園大学 子ども教育学部 子ども教育学科、

²⁾国立市幼稚教育センター

1) 研究の背景と目的少子化問題に対応するため、過去35年間にわたり日本の子育て支援は拡充され、2024年には子ども家庭庁が発足した。これにより、今後はさらなる支援体制の一元化と、子どもの権利を尊重した質的充実が目指されている。各地で多層的で多面的な支援体制の整備が加速しており、X市では202X年に多世代が集う多機能型子育て支援施設が開設され、地域の支援体制が強化された。これらの支援が実際に子育て世代に役立つものとなるため、本研究では保護者にアンケートを実施し、保護者が求める子育て支援の場、機会、内容を明らかにすることを目的とする。2) 方法2024年5月から8月にX市の子育て支援施設（以下、「子育てひろば」とする）の利用者を対象としたweb調査を実施した。フェイスシート、利用状況、子育てひろばの取り組みの評価、利用してからの自身の変化および子どもの変化、子育てひろばの満足度について回答を求め、量的に分析とともに、自由記述を質的に分析した。分析対象者は204名（女性168名、男性36名）であった。なお、本発表では、主に量的分析について報告する。3) 結果と考察 子育てひろばの利用を通した回答者自身の変化について尋ねたところ「子育てについて心の負担が軽くなった」「子育ての悩みや不安を話せるようになった」「自分なりに子育てを頑張っていると思えるようになった」の項目を選択する利用者が多かった。なお、子育てひろばを利用することによって、子どもに変化があったという回答は全体の60.3%にのぼり、全員がその変化はポジティブな変化であったと回答した。また、子育てひろばの満足度について「満足」もしくは「ほとんど満足」を選択したのは全体の95.5%であった。これらから、利用者は概ね子育てひろばについて満足しており、多くの利用者がひろばの利用を通して自身にも子どもにも良い変化があると感じていることが明らかになった。その一方で、利用者の居住区、地域への居住年数、子どもの数や利用頻度によって、子育てひろばの評価に有意差があることも明らかになった。利用者の状況によって子育て支援の場に求めるものが異なることを鑑み、満足度が低い利用者の意見も丁寧にくみ取り、支援のあり方を検討することによって、誰にとっても居心地の良い子育て支援の場とするための具体的な工夫へとつなげができるだろう。